

中井弘関係文書の紹介 (一)

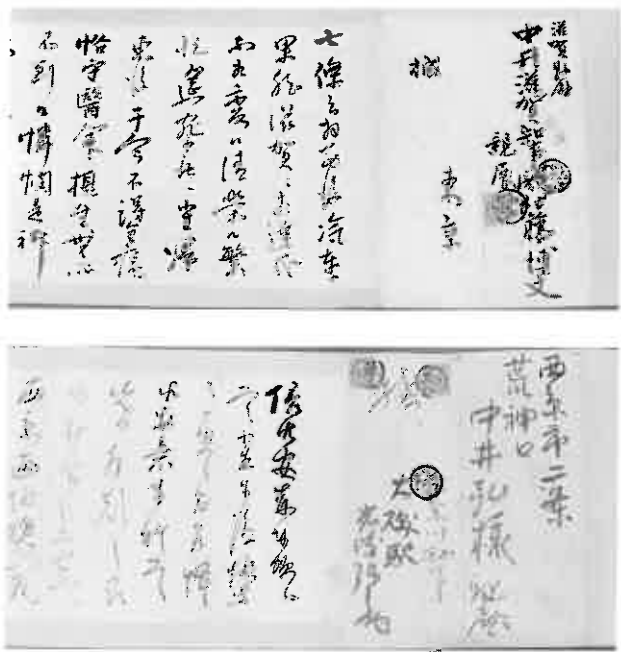
塩満郁夫

黎明館は、中井弘関係文書二十三巻を収蔵している。中井弘をはじめ中井弘宛の伊藤博文などの書簡三五四通がおさめてある。

中井弘は、天保九年（一八三八）十一月に鹿兒島城下平之馬場に、横山詠助の子として生れた。幼名を休之進、変名を鮫島雲城、田中幸助といい、桜洲と号した。藩校造士館に学んだが、脱藩して土佐に渡り、後藤象二郎のもとによった。慶応二年（一八六六）後藤の出資でイギリスに留学し、翌年帰国した。ついで宇和島藩主伊達宗城に招かれ、中井弘三（弘藏）と改名して同藩の周旋方として京都で活躍した。明治元年、外国事務各国公使応接係となり、イギリス公使パークス遭難の時は身をもって従事した。さらに神奈川県判事、東京府判事になり、新政府の軍資調達に当った。明治五年には左院四等議官の職でアメリカに渡り、明治七年駐英公使館書記官に転じ、九年帰朝した。帰朝後は、工部大書記官を経て、十七年滋賀県知事になり、工業の奨励と教育の振興に努力した。二十二年八月元老院議員に転じ、九月貴族院議員に推された。二十六年京都府知事となったが、翌二十七年十月十日死去した。（吉川弘文館「明治維新人名辞典」、河出書房「日本歴史大辞典」等による）

ここでは、この書簡類の解説文を紹介する。今回は、安藤則命、伊藤博文、岩崎弥之助の九〇通である。

- (註) 書簡の解説については次のようにした。
- 1、解説順については、年代の考証はしていない。巻物にしてある順番である。
 - 2、漢字は原則として常用漢字を使用し、変体仮名は現行のかな文字に改めた。
 - 3、解説にあたっては、堂満幸子氏の協力を得た。



(伊藤博文(上)と岩崎弥之助の書簡)

中井弘関係文書一覧

番号	氏名	点数	番号	氏名	点数	番号	氏名	点数	番号	氏名	点数	番号	氏名	点数
1	安藤 則命	1	22	河瀬 真孝	1	43	渋沢 栄一	1	64	西村 捨三	5	85	山田 顕義	2
2	伊藤 博文	47	23	海江田信義	1	44	末広 重恭	1	65	西村虎次郎	1	86	山地 元治	1
3	岩崎弥之助	42	24	加藤 某	1	45	杉 孫七郎	1	66	野村 靖	3	87	由利 公正	1
4	板垣 退助	4	25	樺山 資紀	1	46	清 一	1	67	野津 道貴	1	88	芳川 顕正	17
5	井上 馨	4	26	川田 剛造	1	47	曾我部道夫	5	68	原 敬	3	89	吉田 清成	10
6	井伊 直憲	1	27	木戸 孝允	10	48	高島綱之助	2	69	長谷川好道	1	90	吉井 友実	8
7	伊地知正治	1	28	黒田 清隆	3	49	田中不二麿	2	70	晩	1	91	吉原 重俊	4
8	井上 毅	1	29	黒田 清綱	2	50	高崎 正風	1	71	東久世通禧	2	92	渡辺 洪基	2
9	岩下 方平	1	30	楠本 正隆	13	51	高崎 親章	1	72	藤田伝三郎	1	93	渡辺 千秋	1
10	岩倉 具規	1	31	後藤象二郎	2	52	伊達 宗城	1	73	松方 正義	8	94	渡辺 昇	1
11	岩倉 具定	1	32	五代 友厚	1	53	田中 光顕	1	74	松本荘一郎	2	95	井伊掃部頭意見書	1
12	上野 景範	4	33	児玉源太郎	8	54	谷 干城	1	75	松本重太郎	1	96	公用方秘録	1
13	内海 忠	1	34	税所 篤	5	55	寺島 宗則	3	76	三島 通庸	5	97	中井 弘	13
14	榎本 武揚	5	35	佐々木高行	4	56	徳大寺実則	1	77	三浦 安	1			
15	大東 義徹	7	36	鮫島 尚信	3	57	島尾 得庵	1	78	陸奥 宗光	1			
16	大山 巖	1	37	西郷 従道	1	58	長岡 護美	4	79	森 有礼	2			
17	大井憲太郎	1	38	佐野 常民	1	59	中山寛太郎	3	80	山県 有朋	16			
18	大木 喬任	1	39	三条 実美	3	60	鍋島 直大	3	81	矢野 文雄	1			
19	大谷 清	1	40	品川弥二郎	2	61	長岡 外史	1	82	山尾 庸三	1			
20	尾崎 行雄	5	41	白根 専一	1	62	中江 兆民	1	83	山県伊三郎	1			
21	川村 純義	3	42	重野 安釋	1	63	永田 義近	1	84	山崎 直胤	1			

一、安藤則命

1、「大書記官中井弘殿 安藤則命

親展 至急

尚々渡辺氏へは御伝声之趣、い細相通シ置候也

昨朝御出頭前参上、甚御邪魔仕候、さて御咄之意者、早速内々都而内務之権内ニ御座候、就而者今般之事、御沙汰通随分悦安上、関スル義候間、彼の方へ何と欵御取計様者無之哉、おのつからい細者拝顔可申上候へ共、此段不取敢御含迄、早々及貴答候也

十一月二日 安藤拜

中井公 貴下

二、伊藤博文

1、「滋賀県庁 中井滋賀県知事殿 伊藤博文

親展

東京

七条ニ而拜別後、汽車ハ果然滋賀ニ相達候哉、不相交御清栄御繁忙遙

察仕候、小生帰東後、于今不得全癒、恪守医命損生無所不到、御憐憫

是祈、東京近情ハ、高島鎮将帰坂之趣ニ付、御聞取之事ト奉存候、政

海之談話ハ、雨々晴々之間ニ有之候、世外も近日競進会臨場之由、御

面晤万々御承知可被下候、書外後鴻 草々、頓首、再行

十月十四日 博文

桜洲賢台

2、「中井知事殿 博文

至急

暫時得拜顔度候^二付、今晚御間合なれ^者、永田町へ尊来相願度候、為其、匆々、頓首

九月廿七日 博文

中井賢台

3、「中井様 迎賓館

至急 伊藤

野むら同伴、今後早々詩仙堂ヲ訪問仕度候間、御閑暇なれ^者、御供申上度、帰路山端又ハ加茂相模屋^二立寄、一酌仕度候、草々、拝具

四月念一日

万^一御故障^二而、御^一答可被下候、野村ハ既^二唯今参り居候

桜洲詞伯 博文

4、「中井弘殿 伊藤博文」

中井弘藏様 伊藤

拝復

両替丁三井ハンク落成之趣、随^一行^一覽之為罷越候様、御指揮奉畏候処、此節何分不得寸間、今少之間隙を得候へハ、大藏卿を伴し可申候、

拝復

二月二十五日

5、「中井弘殿 博文

拝復

如諭、昨夜御約束申置候処、本日御差支之趣、明日にても小生ハ差障無之候得共、寧今少し御遷延、辞令書御掌握之上、賀筵之序^二而も可然歎、小生ハ唯命是^從耳 匆々、拝復

一日 博文

桜洲先生

6、「京都荒神口 中井弘殿 伊藤博文

親展

緘 六月十三日 東京

中井弘殿 博文

拝復

桜洲大人 博文

貴翰拝読、明後七日尊宅^二而書画展覽御催之由^二付、参会候様御招帖難有奉謝候、匆々、拝復

四月十一日

7、「工部省 中井書記官殿 伊藤

至急

中井殿 博文

司法省御庸米人ヒール、法律家も御招無之^二而ハ不都合と心附候^二付、申入置候也

三月二十二日

8、「中井君 研北春歌」

当初卒尔之御約束、甚不都合之至^二御座候処、實際致方無之、此段宜布御料理是祈

拜啓、二十七日之事、御申越^二付、早速老僕呼寄申聞候処、此雨天勝^二而ハ、同日まで^二は台所又四周之土持等相連不申、今少し延引相成度申出候間、不得止候間、相整候まで、暫時御延引被成置可被下候、

い細ハ讓拜晤、勿々、敬具

十月念四

9、「中井弘殿 桜川ニ而 伊藤博文

至急内展

桜洲詞契 博文

一寸御尋申上候処、折悪御不在、定而御退出よりいつれへか御立寄相成候儀と奉察候、上野兄より御願申候筈ニ御座候処、来ル二十二日仲人を晚餐之為相招候筈ニ御座候故、賢台ニも御来会奉願候、其内尚拝青い細可申上候、勿々、頓首

八月十八日

10、「中井弘殿 伊藤博文

拜復

桜洲老台 春畝

如諭、昨今暑氣最烈、殆難堪、納涼ハ至極妙策御同意ニ御座候へかし此節御停止中旁両三日見合之方可然狀と奉存候、都合次第、夕刻尊宅へ相窺申候へハ、必御待合せハ不及、拝答、勿々、拝具

七月二十一日

11、「中井先生 博文

奉復

桜洲先生 博文

敬読、然ハ渡辺辞表云々、早速御説諭ニ承服候段、彼是御手数を懸恐入候、是ニ而大ニ安心仕候、入浴之事ハ、願書差出次第、相達候様取計可申候

12、「大椿楼 中井滋賀知事殿 博文

奉復

明廿三日ハ高輪ニ而、家内一同老父之祝宴ニ会合可仕筈ニ付、乍残念、御同伴難仕、此段御含置可被下候、本日ハ秋義会ニ而、中々間合無之此段御憐察可給候、此頃ハ夜間ニ聊偷閑之幸ヲ得る耳、草々、敬復

二月念二 博文

桜洲老台

13、桜洲道兄 春畝

手形ニ枚敬呈仕候付、乍御手数取ニ御遣可被下候、実物を持参仕候訳ニハ無之、唯今之御間ニ合兼、甚御氣の毒ニ奉存候、不患御閑濟可被下候、以上、五月十六日

14、桜洲老兄 博文拝

少々御風邪之趣、折角御加養第一ニ奉存候、巻烟草ハ、応貴意差上申候へ共、金口之烟草ハ持合せ不申ニ付、とても御口ニ適候事ハ無覚束今朝来、尾崎、井上毅、芳川、古澤来訪、引続戦争大ニ疲勞ヲ覚申候余ハ讓拜晤、今晚ハアッパレヲ擁シ、煖爐之側ニ而、充分御あたたまり可被成、飛出ハ決而不宜候也、勿々、拝復

三月十八日

15、「中井弘様 伊藤博文

拝答

桜洲先生 博文拝

貴論之趣奉謹承候、午後七八字頃より陪從可仕、御在宅ニて御待合可被下候、此方より出掛候方便利ニ付、御叩願ハ御断申上候、都合ニ寄

り少々早メニ出掛可申候も難図、御留守なれハ、尊宅ニて御待合せ可申_二付、為念申添置候也

七月三十一日

16、中井賢兄 博文

御注文之業名數業相認候へ共、如御承知、拙筆_二而甚見苦敷、御用_二相立可申哉、不安心之至御座候へ共、一応入貴覽、尚御示教を乞申候也、匆々、不具

十一月念二日

17、「中井知事殿 博文

至急

過日御談示有之候馬車ハ、明朝御入用_二可有之候哉、西郷よりも御借用相成居候哉_二承及候_二付、為念御尋申上候、尤、御者並_二馬共安全ナルモノウ御用相成候方可然、小生方之馬も近来宮内より牽込しもの_二而、充分之試験ハ無之候間、万_一怪我等有之候_而ハ、遺憾之事_二付、御注意_二申上置候、明日ハ炮声及群集之拜観人、就中、□生事ハ随分喧争ナル事ト奉存候、夜分ハ可相成、小生方へ御来会御同車申候都合ナレハ、御談合可申候へ共、午前午後之儀ハ、甚懸念之事_二而、尚取捨_二任せ候為メ、為念相伺置候、草々、頓首

二月九日 博文

桜洲老台

18、「中井様 博文

拝復

可成練合參上可仕候 拝復

十二月二日 博文

桜洲先生

19、「東京築地一丁目二番地吉田吉次郎方止宿

中井滋賀県知事殿 伊藤博文

親展至急

緘 三月四日 小田原發

桜洲先生 春畝

拝答

芳翰奉拝誦候、今夕渡迎來訪之事ハ承知不仕、退省掛ケより浅草觀音_二遊歩_二而罷越、唯今帰宿候処、同人より書簡並_二名刺も有之、遺憾至極_二御座候、老兄も御叩願被下候趣、甚不都合千万、恐悚之到_二奉存候、尊宅へ兎も角も唯今相窺可申候、他_二御用無之候へハ、御在宿可被下候、拝答、匆々、余ハ讓拜晤、頓首、再行

六月念八

20、「東京工部省 中井工部書記官殿 伊藤博文

至急親展

桜洲賢兄 博文

内啓

尔来御壯剛敬賀仕候、僕昨廿六日從若松、対面原之開墾場へ再帰、本日ハ大神宮之豊年祭トカ_二而被抑留、明廿八日福島県令同伴罷越可申猪苗代之疏水、会津之新道仕候_二上出来之成功、感服之至也、帰京之上、詳細御話可申候、予_而願置候官舎之事、決定之上ハ至急修繕へ御着手被下度、殊更_二相願置度儀ハ、厠之儀_二御座候間、何卒洋館之方

ハ、都而西洋風ニ相願度奉存候、三島、奈良原大元氣、吉井翁ハ自若
松經新道、已ニ帰京、必御面晤ナラン、僕ハ来月四、五日頃ニは可致
帰京、書余讓拝鳳、匆匆、頓首、再行

九月念七

21、「中井弘殿 博文

親展

昨夜ハ御来廻鳴謝不変候、御細書之趣ハ帰京之上、小生力ノ及フ限り
ハ相尽可申候間、御安神可被下候、乍去、此上優柔局促之事而已ナレ
ハ、小生其仲間入りハ断然謝絶スルノ外無之、兎角諸先生面晤之上ナ
ラテハ、何も難申上候、時下寒威凜厲之候、別而御愛護是祈、早々、
頓首 一月五日 博文

桜洲大兄

22、「中井様 伊藤

豚肉一壺相添」

桜洲先生 博文

予而申上置候琉球塩豚到着ニ付、一壺拝呈仕候、匆匆、拝具

六月十三日

23、「中井様 伊藤

拝復

昨朝ハ六時之氣車ニ而御西帰相成候由、多分兩三日ハ御延引之事ト推
測、御暇乞ニも御無音申候、御海怒是祈候、御約束之政党略歴史、為
写取入清覽候、愚妻赴快癒候ヘハ、岐阜迄出掛可申候、其節ハ彼地ニ
而、緩々得拜話度相楽居申候、書外讓後鴻候、草々、頓首、再行

七月四日 博文

桜洲詞伯 座右

24、唯今より支那公使館へ出向、食事相濟次第高輪へ罷帰可申ニ付、杉
田御一泊ナレハ、緩々可得拜晤、草々、拝具

廿六日 博文

桜洲老兄

25、「中井弘殿 博文

拝復

中井様 博文

以御高配、山口邸代価相定候趣、御承知敬謝仕候、殊ニ北隣不相当之
儀も無之事ニ御座候ヘハ、無論右ニ而可致決定候、此余尚可然御駈引
奉願候、今夕一寸実地為見分罷越、様子次第等帰路拜趨可相伺候、匆匆、
奉復 九月十二日

26、「中井滋賀知事殿 博文

敬復

大坂行ハ思案中、未相決候処、愈御同伴相叶候儀ニ候ヘハ、暫時罷越
候而ハ不苦、兎も角も尊来之上、行否相定致候間、中邨や迄御出浮可
被下候、吉井翁も明日必来京ナラント相待居申候、頓首、敬復

三月念二 博文

桜洲詞伯

27、「中井弘殿 博文

拝復

桜洲先生 博文

税所渠令出京願ハ、御電報を以致許可置申候、吉井翁へも序之御伝可被下候、明日墓参ハ何時ニ而も不苦候哉、又宅へハ参リ候方可然歟、自然参らぬ方方先方ニ而工合宣布訊なれハ、墓参計ニ可仕、何分之都合御示奉願候、拜具

五月十三日

28、「桜洲大兄 博文拜

敬復

桜洲賢兄 博文

高繩ハ少々普請ニ取掛居候ニ付、靈南本邸ニ御引受可申上候、貴書拜読、来四日吉井翁、宮島氏御同伴、御貴臨可被下旨、欣然之至ニ奉存候、他ニも御心当之雅味風致之有之、佳寶御思付ニ御座候へハ御誘引可被下候、為其拜答而已、草々、敬具

六月一日

29、「桜洲老閣 博文

肅復

谷干城より未夕為何事も不申来候得共、自然小生ニも来会之儀申越候へハ、帰途御同伴可申上候、晴雨ニ不関、嵐山狂奔ハ迷惑ニ奉存候故、大雨ナレハ休メニ可仕候、兎角明朝之天象ヲ見定メ、為御知可申上候、草々、頓首

四月十三日 博文

桜洲老盟兄

30、「中井弘殿 伊藤博文

至急乞貴復

桜洲老台 博文

内陳

今夕五時半頃より御間暇なれハ、御操合せ御来照被下候様、奉願度候、一両先生相招置候ニ付、序ニ晚餐（洋食也）差上申度、何卒御差採、偏ニ奉希望候也

十一月一日

31、「工部大書記官中井殿 宮内卿伊藤

造船局貸与之件、工部省より伺出相成候事ハ、未承及候位之事ニ而、早速福岡へ聞合、至急何分之決裁相成候様、可取計候、共同運輸之方ニ而、彼是苦情不申立儀、過日御示之通ニ而、間違無之事ハ確信仕候へハ、兎角此ニ厚ク彼ニ薄シ杯ト燒餅社会ニ御座候故、甚ウルサク覚へ申候、能々御注意、不偏不党、王道蕩々之御心掛不堪希望候也、

六月十日 博文

桜洲先生

32、「中井弘殿 伊藤博文

拜復

弘先生 博文
田中ハ一昨冬以来相断申候ニ付、小生方へ相勤居不申、昨年黒田先生へも相断置候ニ付、右ニ而止メラレ候事と奉存候、安田先生ハ承知之事と奉存居候処、不図賢台より御尋甚不審ニ奉存候、前条之次第ニ付安田君へよろしく御返詞可被下候、為其、勿々、拜復

四月廿七日

33、「工部省中井弘殿 伊藤博文

拜復

中井殿へ 博文

一寸參候つもりニ、此段御答ニ及候、尤小生ハ是より直ニ罷越候ニ付、老兄も直ニ御越可然、食事杯ハ御免を蒙、場所丈ケ一覽可仕筈なり

六月一日

34、「桜洲老台 博文

拜啓

昨日退出後、単騎叩高門候處、折悪御他出、右ハ過日之御礼申上、且中村氏之寢台引取置等之都合御依頼可申上心得ニ有之候、然ルニ不得拜鳳候ニ付、伊集院之通黒田を訪ひ、此も不在ニ付、京橋近辺を乘廻り帰宿、夜半ニ至ル迄来客有之、対榻雑談ニ而相済申候、中村兄、来ル十二日頃出発之事ハ意外ニ急速ナル事、小子も是非離筈ヲ設け度、和洋いつれニ而も、中村氏之適意ニ撰ひ申度、日限も又然り、何卒御談合御取極奉願候、拜具

六月五日

35、「中井弘殿 伊藤參議

至急

中井先生 博文

内展

今夕渡辺へ面会可仕筈ニ申上置候處、別ニ用事有之、差支候ニ付、他日ニ讓候外致方無之、此段不悪御伝置可被下候、為其、勿々、拜具

七月一日

36、「中井様 伊藤

拜復

華翰拜読、折角の御懇招難有奉存候處、唯今昼食為相済候故、乍残念再遊之節迄御預ケ申置候、今晚十二時発之気車ニ而、東帰可仕、彼是取紛、此度ハ御無音申上候間、御老人江宜希御鶴声奉願候、昨日、四糸暇參拜、税所翁既ニ在リ、老健驚人、老兄之来会セサルハ不埒ナリトテ頻リニ不足之談アリ、午後御閑暇ナレハ、御来照奉待上候、早々肅復、十月十五日 博文

桜洲老台

37、「工部省中井書記官殿 伊藤博文

至急

桜洲先生 博文

今日十二字頃帰宿之上、取極可申候ニ付、御退出之節、一寸弊寓へ御立寄可被下候、以上

七月十七日

38、「中井弘殿 伊藤博文

至急

桜洲賢兄 博文

明二十五日參様可仕旨、敬承仕候、書中ニハ二十六日と御認有之候故廿六日之事と相心得居候處、兩日共、更ニ故障無之候故、欣然昇堂可仕候也 十月念四日

39、「中井様 伊藤

拜復

吉井翁薨去之電報御示、痛惜無限事ニ奉存候、小生帰京頃迄ハ存命ト

存居候処、不図接此報、遺憾至極ニ奉存候、会葬旁御出京相成候而ハ如何、書余、後刻拜鳳、万可得貴意候、不取敢拜答、早々

夏四月念二 博文

桜洲老閣

40、「桜洲老台 博文

拜復

独座擁爐、左書右杯、讀八家文、將終退之祭子厚之文之時也

奉謹誦、明日高輪行之事、西翁へ御照会被下候趣敬承、小子既ニ其心得ニ而、用意申付置候、過刻西郷へ一書を投候処、折悪外出之由ニ而未得一報、如何と甚懸念罷在候処、老台より御通知相成居候へハ、旁大ニ都合能奉存候、余ハ明朝拜鳳之節、万可相窺候也

十二月六日

41、「中井知事殿 博文

至急

今日午後、御閑隙候得ハ、御米臨被下度、若御差支なれハ、明晚可得拜青、尤今晚ハ青木之晚餐有之候故、七時半よりハ不在ニ御座候、為念申上置候、匆々、頓首

二月六日 博文

桜洲先生

42、「中井弘殿、同令夫人 伊藤博文 同梅子」

拜啓、扱来ル廿二日医町官舎ニ於テ、小夜会相催候間、午後九時御来臨被成下度、此段御案内申上候也

三月十七日 伊藤博文 同梅子

中井弘殿 同令夫人 貴下

追テ御諾否共、廿日迄ニ御通知被下度候

43、「京都府上京庚申橋西側 中井元老院議官殿 小田原 伊藤博文

親展至急

八月十五日

昨杉田幸五郎婦東、惠管並水注樋ニ落手、循得審老台與居佳勝、慰碩無量之至也、主稅尊夫人医業終ニ無効、卒然凶変、御一家之痛哭愁傷申迄も無之、所謂永訣終天、再睹無從、遺子之心情不堪推察候、僕等夫妻ニ於テモ平素時ニ親交を辱し、接此凶報、哀痛摧裂、何可勝任、実ニ人生如朝露、朝難期夕、乍去、生死ハ天數、又如何共すべからずと覚悟仕候より外無之、老台も当分鴨涯ニ御閑居之趣、大暑中ハ別而可然、小生も昨今、下利発熱之為、一時相苦候処、漸々快癒、御懸念被下間布候、水注ハ上出来、満足之極ニ候、必竟御高配ノ所致候、感佩至極ニ候、稅所翁御面会之序も有之候へハ、晚香堂蘇帖、髓ニ相達、日々展閱相楽居候段、宜布御鶴声奉願候、先ハ御海旁一書早々如斯ニ候、頓首、再行

八月十五日 博文

桜洲老台

44、「中井様 伊藤

内密啓

桜洲老兄 博文

昨夜御内話中事ハ、必不致漏洩様御注意懇願仕候、今日西郷へ一寸御出仕見候処、頗不同意ニ而、当惑至極ニ御座候、万一も不被行時ハ、却而吹毛求疵訊ニ而、為国家、不堪通念候、屹度他人へ御話有之間布

いづれ今晚尊宅へ御尋申上、緩々尚御談合可仕候間、御間合なれハ、御内居可被下候、尤他^ニ御用事有之候へハ、決^レ而御遠慮被下間布候、敬具 十一月十五日

45、「中井桜洲老閣

親展」

示命敬承、可成差繰、拜趨可仕、草々、拝復

十二月十日 博文

桜洲老台

46、「桜洲老閣 春畝」

過刻御門前ヲ乗越候処、横浜之老嫗^ニ邂逅、小生訪三田候処、老嫗虎吉ト共^ニ尋來候間、御間隙なれハ、光田旅寓へ御出掛被成候^而ハ如何、沖も偶然來会セリ

中井殿 博文

47、「中井先生 春畝生

拝答

弘老兄 博文拜

貴答

御紙面拜見仕候、然ハ小生儀、一日帰府仕候、早速相窺申度候処、御發輦之時機^ニ際シ、彼是多忙^ニ取紛、御疎情^ニ打過、心外之到^ニ御座候、御間暇之節何時にても不苦候間、御來臨可被下候、今夕ハ如何、今朝來雜客如山^ニ御座候処、最早不殘散乱、御來臨にても、更^ニ御氣遣無之、貴答、匆々、頓首、再行

二月四日

三、岩崎弥之助

1、「西京市二条荒神口 中井弘様 神奈川県下大磯駅 岩崎弥之助

親展

倍御安泰奉賀候、^ニ小生尔後快方^ニ御座候間、乍憚、御安意奉折上候、先日拝顔之節、御打合申上置候西京画伯奨励一条ハ、如何御座候哉、素より申上候迄も無之、先方^ニ熱心之真情無之^ハ、折角之企も何等効能も有之間敷^ニ付、其思召^ニ御取捨可被下候、十六羅漢之一件ハ如何御座候哉、是も素より無理之強談相成候^而も、不面白と奉存候、御都合次第^ニて宜敷御聞置可被下候、兼て御配慮相煩候秋出一条も、先日東京^ニて大体之打合相付、双方満足之様子申來候、落着ハ面上候、実地之立ち込^ミ始末致し候筈^ニ御座候由^ニ御座候、御間置可被下候、右要件^已而 匆々、不宣

二月八日 弥之助

中井老翁

2、「京都府二条荒神口 中井弘様 相州大磯駅 岩崎弥之助

親展

博覽会出品、於其筈、進退方時期も可有之、此辺御注意可被下候拝読、不相更御多祥奉賀候、屏風一条、夫々御着手被下候^ニ付、費用之幾何差出候様、御教示拜承、即金二千円老台宛^ニて大坂江差立可申^ニ付、何時^ニても御引出可被下候、画工夫々七之御契約も、後日之苦情ヲ防ク為メ、御取結ヒ置可然と奉存候、屏風之尺寸相定候上ハ、図取り方、直^ニ御下命可然と奉存候、其図取、下画等手間取可申、其内絹地其他之御支度相調ヒ可申と奉存候、右辺御手数之段、恐縮之至^ニ

不堪奉存、貴答迄、勿々、拜具

二月十七日 弥之助

中井老翁閣下

3、「山下町帝国ホテル 中井弘様 駿河台 岩崎弥之助

親展

尔後倍御安祥御多忙之筈と奉存候、先日来、一寸参上之心得にて、一度計御在宿之有無、午後五、六時御帰宿之頃と存電話にて問合候得とも、始終御不在と之返事にて差扣へ居候、一夕御来話被下候てハ如何哉、又御都合次第にて御尋申上候てもよろしく、御都合之宜敷時日前以一寸御報知被下候得ば、千万難有奉存上候、勿々、不宣

五月二十九日 弥之助

中井先生 侍史

4、「山下町帝国ホテル 中井弘様 神田駿河台 岩崎弥之助

親展

先日ハ西京より御書面御惠投之処、丁度地方官上京之期に際し居候間多分、老台にも御登京と存し差扣へ、御返事も不仕候次第に御座候、尔後不相更御安泰之御旨、敬賀之至に奉存候、小弟其後兎角不快勝にて、于今引籠居候、先日ハ肺炎症に罹り、一時ハ頗ル難儀仕候得ども、此頃ハ漸々快方に御座候間、来二十七日朝、大磯江出養生之心得に御座候、其前御閑暇も御座候得ば、一夕御来話奉待上候、右申上候、勿々、拜具 一月二十四日 弥之助

中井先生 侍史

5、「山下町帝国ホテル 中井弘様 駿河台 岩崎弥之助

内展

先日者 尊来難有奉存候、小弟弥明朝より大磯に出養生之心得に御座候、秋田一条ハ、矢張店之花田江申談候事に御取計可被下候、長谷川様今ハ、社不在候得ども、関係人故に同様被為涉合候ても宜敷、左候得者花田江打合之事に相成可申候、御含迄申上候也、時下為朝家、御自愛祈上候、勿々、拜答

二十六日 弥之助

中井先生 侍史

6、「内山下町帝国ホテル 中井弘様 神田駿河台 岩崎弥之助

親展

御手紙拝読、弥明後日頃御帰任之由、就てハ明日御来訪可被下小生差支之有無申上候様、御教示之趣拜承、明日ハ社員之者と約束致し置候事も御座候間、何卒夕飯時分午後六時頃より御光駕被成下候得バ難有奉存候、貴答迄、勿々、不宣

六月二日 弥之助

中井老台 侍史

7、「京都市府下二条荒神口 中井弘様 相州大磯 岩崎弥之助

親展

当方手製之塩鱒一樽、汽車便にて差出候、御晩酌之節御試被成下候様奉祈上候、為再、勿々、拜具 二月廿三日 弥之助

中井弘

8、「帝国ホテル 中井弘様 牛込区砂土原町 岩崎弥之助

親展

先日ハ尊来奉拜謝候、小弟例之負傷未々全快ニ至り不申候間、御教示之深川行も今暫時御猶予相願う之外無御座候間、御聞置可被下候、右申上度、勿々、不宣

十月二十三日 岩崎拜

中井老翁閣下

9、「京都市荒神口 中井弘様 東京府下牛込砂土原町

御直披

岩崎弥之助

昨朝御差出之御懇書、夕刻相達、拜読仕候、過日来新聞紙上ニて、京都府知事ニ御拜命ニも可相成哉之趣拜見、御模様何度と存居申候処、御教示ニて事情拝承仕候、何分ニも為邦家、御尽力祈上候、小弟不快も未々全治ニ不至、砂土原町ニてハ、余り鬱屈も致し候ニ付、二日之夕方、俄ニ思立、駒込之田舎家江出養生ニ参り、今日迄滞留仕居候、今夕方帰宅之心得ニ御座候、老台、多分近日御出京可相成と奉存候、其節万々可奉伺と奉存候、御預り之仏画も御出京迄土蔵ニ保護仕り可申候付、御安神可被下候、勿々、拜具

十月五日 弥之助

中井先生 侍史

10、「京都市荒神口 中井弘様 東京牛込区砂土原町 岩崎弥之助

御直披

春和可掬之候、益御安泰之旨、御懇書被投、拜読仕候、近頃名品御手ニ入り候由ニて、縷々御教示之趣拜承、小生来月中旬家族連ニて御地江見物之為出掛ケ候筈ニ付、其節拜觀御相談可申上候、小生ハ本月下

旬、海路九州江出張、帰途大坂、京都之間ニて家族共々出会候筈ニ御座候御含迄申上候、京地名所見物之節ハ、彼是御心配相願う事ニ可相成と存候、今より御依頼申上候、勿々、拜答

四月十七日 弥之助

中井翁閣下

11、「京都市荒神口 中井弘殿 東京都牛込区砂土原町 岩崎弥之助

親展

倍御安康奉賀候、陳ハ願上候仏画二点、早速御送越被下度、落手仕候如何ニも名幅と感心仕候、永ク留メ置候も如何哉と心配仕候間、御命令次第返上可仕と奉存候、栄賀同作之幅ハ、彼之不動と並ベ置クモ、縁故深き事と存候間、強テ無□なる事ハ難申上候得ども、御割愛ハ相叶被申間敷哉、左候得バ、御札として三百五十兩為替ニて差出候事ニ仕度と存候、是ハ如何敷考ニて、激怒ニ預り候状も不被計候得ども、平生之御心安ニ甘ヘ懇望之段願ヒ試ミ候、素より御愛みニ対して之情願ニ付、断然御拒絶相成候とも、聊も不平心ハ無御座候間、右様御諒察、何分之御指令奉待上候、御船社債、名前替之儀、係り之者へ申談し置候間、其者より直々御照会可申上と奉存候、勿々、拜具

六月廿日 弥之助

中井先生閣下

12、「京都市荒神口 中井弘様 大阪西長堀三菱社 岩崎弥之助

親展

尔後、不相更御安泰奉賀候、二小弟今晩着神仕候、来十八之朝、御地江参上候間、川側之処江宿所御申付被成下候様、御家来之御方江

御下命奉願上候、御手数之段ハ、入京可奉謝候、恐々、拝具

五月十五日 弥之助

中井老翁閣下

13、「京都府荒神口 中井弘殿 東京府下午込区砂土原町

岩崎弥之助

親展

尔後益御多祥奉賀上候、二ニ小生帰途大磯ニて二、三泊之後、一昨夜
帰宅仕候、帰京後ハ何事蟬集、不愉快千万ニ御座候、御憐察可被下候
愚妻より兼て御約束之セールニ、三反差出候間、其旨御通知申上呉候
様申出候、御落手可被下候、先生御秘藏之台光外、大坂ニて御手収相
成候仏画二幅、暫ク拝借仕度、御都合次第御送り越奉祈上候、素より
分取流ハ不仕候間、平穩之御相談可仕候、時下不順、別して御自愛祈
上候、勿々、拝具

六月十四日 弥之助

中井先生閣下

14、「京都荒神口 中井弘様 大坂西長堀三菱支店 岩崎弥之助

御直披

御懇書拝読、昨日ハ御機嫌克御帰宅之由、小弟も連日之戦ニて草卧候
得ども、空前絶後之出来事ニて、大愉快、保養仕候事ニ御座候、滞京
中ハ種々御懇情相蒙り、難有奉謝候、税所翁、伊集院君へも御序之節
深ク御伝言奉祈上候、小弟も弥明後七ツ、上途東帰之心得ニ御座候、
御合置可被下候、時下不順之場合、為邦家御自愛奉祈上候、勿々、拝
具 六月五日 弥之助

中井老翁

15、「京都府下荒神口 中井弘殿 大坂府下西長堀三菱社

岩崎弥之助

親展

御懇書御遣、拝読、池庄江旅宿御申付置被下候由、御手数之段、難有
奉存候、明日ハ途中見物之上、着宿可仕候付、停車場江出迎之者ハ御
差止メ置可被遣候、明日之都合ニて、稲荷より下車、其近辺遊歩仕候
哉も難計奉存候、勿々、拝具

五月十七日 弥之助

中井老翁閣下

16、「西京荒神口 中井弘様 名護屋 岩崎弥之助

親展

明夕方西京中村屋ニて一宿之積リニ御座候間、御閑暇なれば、同所ニ
て御会話奉願上候、右耳、草々、不宣

四月二十五日夜 弥之助

中井翁閣下

17、「築地三丁目十一番地 中井弘殿 神田区駿河台 岩崎弥之助

親展

過日ハ尊来奉拜謝候、小弟兎角全快ニ不至、矢張引入、困却罷在候、
御憐笑可被下候、御懇書ニて、近日御帰リ之由、其前一寸参上可仕之
処、右之次第故之事ニ寄、御無礼仕り候哉も難計、不悪御閑置可被下
候、明春ハ西京ニて拝眉仕度と奉存候、貴答迄、恐々不宣

十二月廿一日 弥之助

中井先生閣下

18、「西京」二条 中井弘様 東京府下神田駿河台 岩崎弥之助

親展

尔後倍御安祥奉慶賀候、陳ハ御惠投之四月二十八日付之貴翰及五十枚之唐蒲団、昨日相達し、御厚情之段、千万難有奉謝上候、家内よりも宜敷御礼申上候、此之度、伊香保ニテ御待受ケ申上度と奉存候、其節ハ改メテ可申上と奉存候、右取紛中御請迄、勿々、不宣

五月二十三日 弥之助

中井先生

時下御自愛祈上候

19、「滋賀県庁」ニテ 中井弘様 東京神田駿河台 岩崎弥之助

親展

薄暑之候、老台益御多祥可被為涉、奉欣賀候、二段小生も無事ニ消日罷在候間、乍憚、御安神奉祈上候、陳ハ先般御滞京中、御心配被成下候長崎造船所一条も、昨日願之通許可相成候間、御安神可被下候、右ハ、老台之御尽誠被成下候より、小生之微志貫通致し候儀と、難有奉謝候、右御礼迄、草々、拝具

六月十七日 弥之助

中井様閣下

時下御愛護奉祈、奥様へもよろしく

20、「滋賀県庁」ニテ 中井弘様 東京駿河台東紅梅町 岩崎弥之助

御直披

弥太郎死去ニ就てハ、縷々之御書被下、拝読仕候、死者方物ななめ事

ハ覚悟しなから、実ニ創業同様之場合、何とも致し方無之、痛歎之至

ニ不堪、狼狽罷在候、乍憚、御憐察可被遣候、乍併、今日となり如何程悔ミ候ても、其詮無御座、死者ニ対スル小弟等之責任、実ニ重大ニ有之、其方向も迷ヒ居候、何分ニも、乍此上、御引廻し被成遣候様、伏て奉願上候、右御返書旁拝答、草々、不備

二月十七日 弥之助

中井様閣下

21、「中井弘様 弥之助

拝答

拜啓仕候、御登京之由、夕刻御尋可申上と奉存候、御新撰之統計表八冊御惠示、難有奉謝上候、暫時拝借仕度奉存候、勿々、不宣

六月二十五日 弥之助

中井先生 侍史

22、「中井弘様 岩崎弥之助

親展拝答

御懇書被遣、拝読仕候、縷々御教示趣拝承仕候、明朝十一時過、松方伯御旅宿迄參上可仕候、來客中貴答迄、勿々、敬白

五月廿七日 弥之助

中井翁閣下

23、「中井弘様 岩崎弥之介

拝答

不相更御佳適之由、奉賀上候、其後ハ御無音申上居候、実ハ小弟先日より病症再発、又々草臥、困却仕居、不本意之至ニ奉存上候、老台、

十二日御帰任之節、嘸々御多端之御義と奉存上候、川田も先日、四日市より大坂へ鳥渡出張仕り居候、多分同処にて拝顔可奉伺と奉存候、御家内様御乗船之節ハ、万事注意可仕候、海上御安全御帰任、万々奉希望候、草々、拜具

十一月九日 弥之介

中井様 侍史

毎々結構之御賜り物被下、千万難有奉拜収候、御礼申上候

24、「築地大椿楼 中井弘様 岩崎弥之助

親展

益御安泰可被為在、奉恭賀候、昨日ハ御願有之、大椿楼へ相伺候処、御不在中、奥様へ御目ニ懸り、帰宅仕り、花田ヲ以御願之事情申上候様、相命し置候、右御願とハ外之義ニ無之、弊社にてハ備中ニ於て、一二銅山之営業罷在候処、近年銅価之下落より将来維持之目途も難相立、生野ハ備中とハ隔地も不甚ニ付、御任セ相蒙り候得バ、双方之支配ヲ兼、儉約も充分相整ひ候間、二鉢ともニ永ク維持之道ヲ得可申ニ付、今度、工部省へ出願仕置候、就てハ老台より其筋之人々へ内情御通之上、御賛成奉願上度、工部省にてハ、御厄介之長崎造船所ハ、弊社ハ御委任相成候義ニも有之、万一他ニ応人有之ても、生野ハ其縁故ヲ以テ、弊社へ御委任相成候事ニ被成下候ても、敢て不当之事ニも有之間敷と奉存候、何レ委細ハ拝顔可奉願候得ども、機会も有之訳ニ付、其機不失為メ、書面ヲ以、大略歎願仕候、何卒御尽力、伏て奉祈上候草々、拜具 七月七日 弥之助

中井様閣下

25、「中井様 岩崎生

拜復

過日者、御登京之御模様仕り、今日者御佳適可被為渡大賀之至、拙生も先比より不快ニ而、熱海地方へ罷越居申候処、昨夜帰宿仕候処、未夕快方ニ移り不申、以前御無音申上候処、明日御枉駕之旨敬誦仕候、折角之御懇志取繕、拜迎仕り可申、失恭之時ハ御海涵奉存候、無存懸、何寄之御名産御惠贈、難有感佩仕候、拜鳳奉謝可申上候へ共、不取敢、草々貴酬耳申上度、恐惶拜具

十八日 岩崎生

中井先生 侍史

26、「御殿山杉田屋ニテ 中井弘様 岩崎弥之助

親展

拜啓、昨夜ハ不相更失札申上候、此ニ差出候手製之竹輪並ニ葡萄酒壹箱、御上京御祝之印迄ニ拝呈仕候、御叱留被成遣候様奉願候、七月二日午後四時頃より、御閑暇ニ而御座候得バ、晚餐差上度、御光駕奉願候、美人ハ御誘引之程奉祈上候、御都合宜敷候得バ、阿部氏其他御同伴被成遣候度、御来駕之有無、御面倒ながら御教示奉待上候、勿々、謹言

六月三十日 弥之助

中井様 侍史

27、「中井弘様 岩崎弥之介

御直披

先日ハ御上京之由、早速参賀可仕善之処、劣生事、先日帰京後于今病

氣にて草臥罷在、失敬御無音相渡り居、多々失礼之至、御海宥奉願候
扱ハ今日不存寄、結構なる御土産物頂戴仕り、御厚情之段、千万難有
奉拝謝候、何レ不日、快氣之上ハ參上、万々御礼可奉申上候、御請迄
勿々、敬白

十月七日 弥之助

中井様研北

28、「中井弘殿 岩崎弥之助

托中山氏

先日^者尊来奉謝候、此之書面ヲ持參致候高知県人中山秀雄と申者、先
生^江御面会一事、御願申上度事御座候由ニテ、小生より紹介申上候様
願出候、右中山ハ、小生別懇之者ニ付、何卒御面会被成下候様、願上
候、御頼迄、勿々、謹言

十二月一日 弥之助

中山先生 侍史

29、「築地旧大椿楼吉田氏方、中井弘様 岩崎弥之助

親展

倍御安泰可被為人、奉慶賀候、先日ハ頗ル結構なる御土産頂戴、難有
奉存上候、未御礼ニも御無音申上居候、陳来二十二日午後四時頃より
御閑暇ニも御座候得バ、御夫婦様ニて弊社へ御来遊願上度、其日ハ、
岩村、日下之二夫婦も案内致し置候間、何卒御操合奉願上候、勿々、
拝具

二月十九日 弥之助

中井先生 侍史

30、「中井先生 弥之助

差上置

前略御仁免奉祈上候、明日ハ宇治之方^江出足之心得ニ御座候間、今夕
ハ御別レ之為メ、旅宿ニてお会食奉願上度、何卒夕方より御光駕奉願
上候、勿々、拝具

五月廿五日 弥之助

中井翁閣下

31、「築地二丁目十番地 中井弘様 岩崎弥之助

乞御内披

一昨日ハ、縷々之御懇書被降、難有奉拝読候、老台、又々此之十五日
頃、御下神之由、撫内外御多忙之御事と奉察上候、小弟も此之中旬ニ
ハ是非とも旅行之心得ニ御座候間、都合ニより御供可仕奉存上候、彼
之一件も御留守中、夫なりニ相成居候処、兼て之御沙汰通、弥弊社へ
御任セ之御都合ニも御座候得バ、小弟出發前、御取極メ相成候様奉願
上度、小弟も三四ヶ月ハ各地巡国之筈ニ御座候間、留守中ニてハ、支
度準備も難出来候ニ付、可相成ハ、小弟在京中成否何とも終局致し置
申度、右様御承知可被遣候、老台、明後日頃夕刻より御閑暇ハ不被為
在候哉、久振り浪花辺之新開相候様仕度、御閑暇之有無御示被下度
其上ニて何所へ尊来相願候か、更ニ可申上候、草々、拝具

六月二日 弥之助

中井様 侍史

32、「中井弘様 岩崎弥之助

親展

其後、一寸參上之心得ニ御座候処、先日、甥之久弥、本国鳥渡帰省致し、久振之帰省ニて、彼是取紛、意外之御無音申上居候、不悪御聞置可被下候、弊社員堀田連太郎、道路之事ニ付、老台へ御願ニ申上度事有之、御伺申上候筈ニ付、何卒御面会被成下候様奉願上候、何日御帰県可相成、二、三日御滞京なれば、一夕御操合奉願上度と奉存候、勿々、
拜具

七月一日 弥之助

中井先生 侍史

33、「滋賀県 中井弘様 岩崎弥之助

御直披

益御安泰可被為渡、奉賀上候、陳ハ、先日神戸ニてハ、態々船中迄尊来ヲ辱、御厚情之段、千万難有奉拜謝候、小弟も一昨夜、無事ニ当着仕候間、乍憚、御一意奉願上候、造船処之事業も、近々改良之端緒ニ相付候処、何分新旧之人員多数ニて、其内ニハ不用之人物も大勢有之閑居之者、混合致し居候てハ、到底人心之折合も不宜候間、成ル丈ケ平穩氣長ク取扱候心得ニハ御座候得ども、工場全体之為メニハ、不得止之処分も致し不申てハ、不相成義と、劫て心配中ニ御座候、不悪御聞置可被遣、若し断然之処置ニ出候時ハ、他より種々御聞込ニ可相成事も、可有御座候得ども、小弟ハ全体之盛衰ニ着目仕り居候上ハ、決して御心配不被成下様、前以御聞置奉願上候、小弟病氣ハ未タ快然不仕候得ども、次第ニ悪き方ニハ無御座、例之著戦も丸で廃止ニ之仕居候、御憐察可被遣候、時下御自愛第一ニ可奉祈上候、草々、拜具

八月二十二日 弥之助

中井様膝下

34、「築地二丁目 中井弘様 弥之助

親展

先日御約束申上置候竹之子、些為持差上候也

五月十二日 弥之助拜

中井翁閣下

35、「中井弘様 岩崎弥之介

乞親展

昨日ハ御馳走被成遣、御厚情之段、難有奉感謝候、今日ハ是非とも御出発之由、吉川も次便迄滞京之事ニ相成居候得ども、先生之御乗船ニ就キ、俄ニ帰坂致候事ニ執計置候間、彼之地ニて之御用向ハ、万事無御如才、御下命被成下候度、同人へハ委細為相心得置候事ニ御座候、小弟も是非次便ニて下坂之心得ニ御座候、右様御聞置奉願候、今日ハ是非とも横浜迄御見立可申上筈候処、又々明日角力之取組為致候事ニ相成、彼是取紛甚タ不本意之至ニ奉存候へども、今日ハ不参仕候、不悪御聞置奉願上候、草々、拜具

四月九日 弥之助

中井様 侍史

36、「築地二丁目十番地 中井弘様 岩崎弥之助

親展

拜啓、不相変御安泰御渡可被為在、奉賀上候、陳ハ来十五日午後四時より新橋之伊勢源ニて、一寸一酌御饒別申上度、何卒御操合之上、御来駕奉願上候、尤も御相客として安田、塚原、谷元之三君へ案内書差

出置候、右様、御承知可被遣候、勿々、謹言

十一月十三日 弥之助

中井先生 侍史

37、「築地」二丁目十番地 中井弘様 岩崎弥之助

親展

二、三日ハ御無音申上候、扱ハ小弟も明日出発之心得ニ御座候処、彼之約条一件、未タ相浮不申より、夫レが為メ、明日も延し、廿五日之乗船ニて出発之心得ニ御座候、右様、御承知可被遣候、明日、小弟町へ御光駕被下候旨、御伝言之趣奉畏候、早速弥太郎へ聞合候処、何之差支も無御座ニ付、何卒午後五時頃より御光駕奉待上候、御下命之後藤氏も相招き候様可仕候、右拜答迄、勿々、拜具

六月廿一日 弥之助

中井先生 侍史

38、「工部省」 中井弘様 岩崎弥之助

御直披 乞貴答

不相交御佳適御渡可被為在、慶賀之至、扱ハ老台、今夕三、四時頃より御閑暇ニも御座候得バ、不忍池之端愚兄之弊屋へ御光臨被下間敷哉弥太郎も久振り拝顔ヲ得、御快談も拝承仕度旨、兼より申居候、御都合も相叶ヒ候得バ、千万幸甚之至ニ奉存候、可否とも此之者へ御示可被下候、勿々、拜具

四月一日 弥之助

中井様 侍史

39、「」方ニテ 中井様 岩崎弥之助

御直披

書添申上候、若も小弟帰坂之前、御帰京ニ御決り被成候得バ、乗船切符之事ハ、神戸支社詰之岩永省一迄、御一封御投被下候様御願候、内田耕作氏ハ、此度小弟と同行之事ニ取極メ候間、右念之為申上置候、岩永氏へハ小弟より委しく通知仕り置可申候也、

拜啓、今朝ハ御邪魔申上、失礼之至奉存候、小弟事、東京より之電信ニて、今日出発、備中行ニ決定仕候間、右様、御承知奉願上候、何レ十日前後之内、帰坂可仕ニ付、自然夫迄御滞留なれば、京坂之内ニて、重テ拝顔可仕奉存候、勿々、謹言

七月卅日 弥之助

中井先生閣下

40、「西京」二条 中井弘様 東京神田区駿河台 岩崎弥之助

親展

尔来倍御安祥、奉敬賀候、陳ハ御命令之由ニて、昨日、杉田屋より土佐産てーブル製之卓子一基送り越、礎ニ落掌仕候、頗ル有用之品ニて御厚情千万難有奉拜謝候、永ク記念ニして愛蔵可仕候、拝眉之節、万々御礼可申上候得ども、不取敢御請迄申上候、勿々、拜具

六月九日 弥之助

中井先生 侍史

41、「築地藤田組之隣」 中井弘様 弥之助

親展

昨日略御約束申上置候通、来二日ハ午後二時より駒込之別荘へ御光駕奉願上候、高島君へハ、其節御約束ニ及置候処、誰か外ニ二、三名御

知人御誘引被成遣度、小弟よりハ川田ニ吉川之二人ノミ申遣置候事ニ御座候、北地へハ美人之注文ハ致置候処、誰かニ、三人新橋之者も御召連可被下候、先生御差支無御座候得バ、種田、谷元之二人モ御誘引被下候ても御如何哉、御取捨奉願上候、勿々、拝具

十一月三十日 弥之助

中井先生 侍史

42、「天津滋賀県庁」にて 中井弘様 東京駿河台 岩崎弥之助

親展

春暖相催候処、倍御安祥之筈、奉賀上候、先日、御登京中ハ、深々御出会も不仕、不本意之至奉存候、陳油小路家買入云々御教示之旨、拝承仕候、此ミ、金三十円封入差上候間、御使用可被下候、此之地所ハ御所有地と相隣り居候上ハ、貴兄之御考通り、御使用相願度、小生参候節ハ、拝借致し候事ニ仕度と奉存候、小生も此度ハ、老人同伴、下坂之心得ニ御座候間、其節ハ緩々拜話ヲ可得と相楽居候、貴答迄、勿々、拝具

五月二十八日 弥之助

中井先生 侍史